改憲嘆き節（ぶし）

附 ― 戦死した同級生との交友

旧職員　白川益雄

キナ臭い匂いがするようになって来たと言う声を、二、三年前から聞くようになったと思っていたら、翌年はもう自衛隊をイラクに派遣することになる。昨年はそれらを正当化する為に、改憲の声が喧しい。自民党は手回し良く新憲法草案を発表し、野党である筈の民主党までもが改憲賛成でいる。庶民の声は、マスメディアに大きく取り上げられることは殆ど無く、僅かに大江健三郎の呼び掛けに応じた八人の文化人が立ち上げた「憲法九条を守る会」のこと位である。

それにつけても、僅か数ヶ月の軍隊経験しかない戦中派の私ですが、近くは戦死した同期の十数名の人達、遠くはその背後にある三百万の陸海軍の将兵達、軍属の人々、更には、銃後にあって原爆死した広島・長崎の人々、空襲により戦災死した何十万の人々・女性・子供・老人達のことを思わずにはいられな

いでいる。国が起こした戦争の為、その生命を絶たれたのだが、平和であったらどんなに素晴らしい命の花を咲かせたか判らない。戦後六十年間の戦争にない平和な時代を生きていたらと思うと涙を禁じ得ない。この六十年の平和は、膨大な人々の犠牲の上に成り立っていることは誰でも判っていると思うのだが、世の趨勢はどうも戦争を肯定する方向へと向かっている。平和ボケをしてしまって六十年前の敗戦後の苦悩を忘れてしまっている。「誰も『戦後』を覚えていない」と言うような題名の本が出版される所以である。

歴史に学ぶべきだと思いながら、いつも忘れてしまうのが人間だと言われるが、極く簡単に日本の歴史を振り返ってみる。明治維新は、封建体制を近代国家体制に変えた大変革であることは言うまでもない。指導する者は、薩長の下級武士出身の連中で、今までの大名・家老・上級武士の上に立つことになる。信長・秀吉も天皇に臣従して位を貰った故知に習って天皇を絶対者として、欽定憲法を作り欧米先進諸国に追い着く為の大方針として「富国強兵」策を取った。着々と成果を挙げ、先進列強と肩を並べることになるが、漱石が「外国が十歩で進んだ所を日本は一歩で進んでいる」と、その危うさを指摘した通り、西南の役の後、十年に一度位の割合で新しい戦争に突入して、大富強国アメリカと大東亜戦争を引き起こし、最後は世界を相

手にするような状態となり、白旗を掲げたのだ。

右のような結果になったとは言え、明治の人間の偉かった点は、横槍さえ入らなかったら近い将来には必ず先進国に追い着いて見せると言う自信を持って居たことだろう。隣国中国が、ヨーロッパ先進国に蚕食されて行く実態を見て、何が何でも出来る限り早く追い着かねばいずれ日本も中国同様になると言う危機感を根底にして、絶対確実に追い着く具体案として天皇を上に奉る欽定憲法を作りあげたのであった。事実、第一次世界大戦で漁夫の利を得て五大国の端に入る所までは来たものの、流石の明治の人間も満州事変以後までは見通せなかったとしか言いようがない。自由・人権・福祉・環境には目を瞑り、漱石のように、自由と個人の問題で苦闘した人もいるが、これは平和憲法・教育基本法を俟たねばならなかったと言えよう。

斯く言う私は、敗戦の昭和二十年五月から足掛け四ヶ月間、大竹海軍潜水学校・第六期第二次予備学生・生徒隊の一員として、特攻の要員たるべく死を賭して頑張りました。人生八十余年の間、軍隊生活以外に、死を覚悟して行動したことは、恥ずかしながら有りません。人生二十五、国のため、天皇陛下のためにと、死を覚悟して軍隊の猛訓練に耐えた戦中派の我々は、敗戦後全くの虚脱状態でした。国も同じようなことで、何の目標も無く、明確な指導方針も示せないままに、我々はただ阿呆

クサイ・馬鹿クサイと言う気持ちでダラダラと日を送り、前途には一条の光さえも見いだすことは出来ませんでした。神と仰いだ天皇は人間宣言を出してバカクサイ、合格覚束なしと思っていた最高学府の試験に合格してバカクサイ、入学するやある先生から今度入学した傍系の学生は、マトモな論文を書くには今までの倍の年月が必要だと言われて、学問も亦バカクサイとソッポを向いたアホクサ人生が始まる。そんな中で平和憲法が公布され、微かに進む方向は知れた。自由・民主・反戦・平和の方針に、今までに無かった新鮮さを嗅ぎ取ったのだった。

戦後六十年、平和憲法の下、我が日本はG・N・P世界一を誇る経済大国に成長したものの、金利一辺倒の政策からバブル現象を起こして現在に至っている。

昨年、終わり頃に、連続して起こった女子小学生を殺すと云う人間倫理の問題、そして強度偽装事件――最高のものを作って人々に提供して利益を得る生産者・売買者＝要するに商人の倫理の問題、どう考えて見ても、我々の日本の社会が狂って来ているように思われてならない。始まりは池田首相の「貧乏人は麦を食え」「所得倍増論」から田中首相の「列島改造論」に至る政策で、人間の価値は金だと思わせた点からだ。高校生が卒業時に「金持ちに絶対なってみせます」と言うようになった時からだ。文部省も企業に迎合するような人間作りを取ってき

たのが実情である。どこから直すのか、考えて見ると気が狂いそうになる。最も判り易いのは、現在我々がいつでも見ることの出来る平和憲法に戻ることである。今から論議して改正憲法を作るなど、手遅れになる危険性があるように思われる。

「平和憲法」の平和憲法たる所以は、「改正」の章があることだ。いかに民主的で平和な条項か判ろう。明治人はこのような章は絶対に設けない。私も明治人に習って改正するとすれば、「この憲法は不磨の大典である」とするか、この章は廃止にする。呵々。

冗談はさて措き、国や民族はずっと持ち続けた何か独自のものがある。それが作り出したものが文化と言える。戦後、古いものは皆駄目だと弊履のごとく捨ててしまった所に現在の乱れがある。芭蕉は、自分の打ち立てた「俳諧」も不変のものではなくて「不易流行」だと教えている。絶対変わらない不易があってこその流行で、わび・さびの世界が、軽みの世界へと移るのが「流行」だと言う。皆さん、早とちりをして、芭蕉の「流行」を行うことが改憲だと取っては駄目です。不備な「欽定憲法」を変えなかった明治人は本当に偉かったと思うのですが、すべて法律によって流行を演じ補ったのです。平和憲法が「不易」で法律が「流行」と言う訳です。

さて、憲法改正ですが、自民党の草案はあちこち触れていま

すが、すべて枝葉末節のことですので、法律を作ればよろしい。既に、いろいろな方が改正の眼目は何か、明確に指摘して居られるので安心していますが、マスメディア全体から見ると心配なので、この拙文を記した次第です。自民党を始めとする改正論者の眼目は「戦争の出来る軍隊を持つ」ということです。首相は「改革の眼目は郵政改革の一点だ」と叫んで大勝したように、マスメディアも、「改憲論者の眼目は、戦争の出来る軍隊を持つという一点にある」と言ってほしいものですネ。改憲が実現すれば、直ぐに徴兵制の法律が出来、若い人々は一網打尽で軍隊入り、運の悪い人は戦争行きです。

湾岸戦争が起こって、日本から掃海艇を派遣するか問題になった時、若い人々が反対して起ち上がるだろうと思っていましたが、何の反応もありませんでした。これが廃案にならないと日本は大変なことになるだろうと思っていましたが、それ以後立ち上げられたマスメディアの合い言葉は、一国平和主義・国際化・グロバリゼーション等で、有無を言わさず国論を統一し、東南アジア方面への自衛隊派遣が行われるようになり、とうとうイラクへは大型兵器付の派遣となりました。若い人達そして特に女性はどう思っているのでしょうか。私は、こう言う時の力になってほしいと思い、男女同権を大いに奨めた者でしたが、――。

戦後、北欧の福祉国へ視察に行った公人が「どうしてこのような福祉国をつくりあげたのか」と聞いたところ「今日まで百八十年間戦争をしなかったからです」との答えに、絶句して帰国した人達の中から、平和憲法の大切さを唱えた人は無かったようですし、又、平和憲法を盾に、欧米諸国に対した人も出ないで現在まで来た結果、ただ改憲論ばかりが喧しい世の中になりました。戦中派の我々が護憲を固守しようと言う気持ちを、老人の戯事などと嘲笑しないで下さい。素晴らしい自然に恵まれた、この愛する日本をして、およそ悲惨で無駄な戦争を再びさせない為、最後の国への御奉公と思って、「憲法九条を守る会」にも入りました。昨年、朝日新聞の記者のインタビューに応じた京大元教授・多田道太郎氏の聞き書きの最後に、最近、憲法問題に関心があるとして曰く、「憲法改正？何ぬかしてけつかるねん、あほなこと言うなという感じ。」と喝破されました。この憤りの底に、いかに深い悲しみがあるか、改憲論者にどれだけ判るでしょうか。

平和憲法は、我々日本人に与えられた天の啓示です。我々日本人は神から試されている訳です。自由・民主・反戦・平和、いずれも人間にとって永遠の課題が含まれています。平和憲法は、人類の最高の理想の盛られた憲法なのです。我々日本人は、人類の代表として、永遠への挑戦をする使命を与えられたので

す。何たる壮大な使命なのか、体が震えて来ます。平和でないこの二十一世紀に、平和を叫ぶのはナンセンスと考える人がいるようですが、そうだからこそ、平和をより強く叫ばねばならないのです。ガンジーを思い出して下さい。一人で世界を相手にしたのです。

「人道のため、イラクへ自衛隊を派遣するのだ。日本の行くところ安全なのだ。との掛け声でイラクへ行くのに何故重装備の兵器を持参したのでしょう。平和憲法の下、丸腰で行くべきだったのです。もしそうであったら、世界をして瞠目せしめる壮挙となり、「日本に平和憲法あり」と喧伝されたことでしょう。そして、平和憲法は、不磨の大典となり得たのです。千載一遇の好機を逸したと言えましょう。

聞けば、日本の自殺者は年三万人とのことですが、何と無駄な死をすることですか。自殺礼賛者は居ても、平和憲法の精神を体して、国のため死のうと言う人間は、日本に居ないのでしょうか。日本の伝統を思えば、そんなことはありません。我々の祖先の武士は、実に偉かったと言えます。死を背中にして日々を生きていたのが武士です。〝葉隠〟の「武士道と云は、死ぬ事と見付けたり」は、まさに武士の精髄です。武士の血を引いている日本の若い人達よ、永遠を目指して、平和憲法てふ旗を世界に翻そうではありませんか!!

戦死した同期生との交友

京都三中、三十二回生（昭和十六年三月卒業）は、総員二百三名だった。クラスは甲・乙・丙・丁四組編成で、五年間同じ組だった者は無く、四年間同級の者は一、二名、五年間一度も同級にならなかった者は、大体七十名位で、実に旨く編成してあった。五年間同級にならなくても、誰でもその姓は知って居り、仲の良い友達に同級にならなかった者も沢山いたのが実情である。大京三中を目指した飛躍の年に当たる、期待された学年であり、学力差の余り無い、堅実・穏和で真面目な、ドングリの背比べ的な集団だった。「類は類をもって集まる」とはよく言った諺で同じクラスになっても余り話すことも無かった人も居り、ここに記す交友は全く私的な偏ったものであることはお許し願いたいものである。

我々は二年生の時に、日中戦争が始まり、化学の中島先生、次いで日本史の楠先生の出征があり、配属助教（曹長）の伊東先生の戦死に襟を正したり、戦争中ではあったが、その影響は殆ど無く、中学生活を伸び伸びと過ごしたのであった。卒業後の補習科は、二浪五名、他府県者三名、総員七十一名の大世帯

だった。十二月には対米英宣戦布告があり、和歌山から来ていた人だったと思うが、授業中に「徴用が来た」と言って早引きをして帰宅することがあり、皆の目の色も変わったようだった。戦死した人で補習科のお世話になったのは僅かに二人だけで、優秀な人が多かったのであろう。

いつ頃からだったろうか、平和な世の中で、大したこともしないで生きている自分と戦死した級友を比べて「彼等は国のために死んでしまったのだ」と思うと、何か自分が悪いように感じることがあるようになる。天皇の呪縛から抜け出すのに二十数年も掛かり、アメリカに敗けたと思うと戦記物も余り読めないでいたのが、天皇も同じ人間だと思えるようになって、漸く海軍を中心にして戦記物を読み、その激闘に感動することになる。陸軍の撤退作戦等では、胸は痛むばかりであった。改憲の声が出る世となり戦死した級友の死が無駄になってしまうとの思いは募るばかりで、切磋琢磨した彼等の鎮魂のためにも、その言行や姿を残そうと、蛇足になるこの一文を記した次第である。

青柳滋郎（陸軍士官学校）ビルマ撤退作戦で戦死

中肉中背、顔色は稍々白く、毅然としたものを内に秘めた秀才だった。学舎は二階建てで、東端に一年甲組、階段・売店を隔てて二年生が二組入っていて、二階に一年乙・丙・丁の三組

が並んでいた。各組に級長一名、副級長二名が決められ、制服の襟には、桜型で地は藍色、HONOURの頭文字Hを白色に抜いた七宝製のバッジが輝いていて、皆からの畏敬・憧憬の象徴であった。私は甲組だったので一階だけで騒いでいて、クラスの中には仲良くなった人も沢山出来たが、二階の人とは殆ど交友らしいものは無く、バッジから青柳君を覚えているような次第である。

井尻助之（京都高等工芸・海軍飛行予備学生十三期・攻二五六部隊）昭和十九・十・十六台湾沖南東にて戦死

色白、眉目秀麗、貴公子然とした真面目な好青年だった。三年生で初めて同級となり、半年一寸机を並べた仲だったが、四年生となり草相撲で仲良くなる。四年生に進級したのはよかったのだが、数学が全く理解できなくなり、勿論英語・国語の成績も低下して、自暴自棄的な精神状態だったのかも知れない。腕っ節は皆よりは一寸強かったので、相撲の好きな連中を集めて、彼等を投げ飛ばしたりして憂さを晴らしていたのだろう。中でも井尻君は敗けると判っていてもう一丁もう一丁と言って掛かって来て、全くこちらが悲鳴を挙げる位に執拗だったのを覚えている。そんなことから何かと話しをしているのだが、その内容に至っては一切記憶に残っていないのは残念としか言

いようがない。

攻二五六部隊の攻は恐らく艦攻で、航空母艦での発艦・着艦の訓練はその頃もう無くて、敵艦への体当たり訓練を重ねた筈で、九州南端の特攻基地から出撃して、あの粘りを発揮して体当たりを敢行したのだと思っている。井尻君の墓地を同期生が見付けてくれたので、何度も参ったことである。

上田清市（海軍兵学校）沖縄上空にて戦死

一緒の組になったことが無くて、良く知らなかったが、五年生に進級した時、共励係を仰せつかった。今で言う風紀係で二人で昼の休憩時間や放課後、校内を巡視したものである。悪戯をしたり、喧嘩をしたりしているのを見付けると、上田君は即座に大声で注意をしてテキパキと処置するのはなかなか威厳があった。二学期の水泳大会で全員プールに集まり、出場者以外はスタンドで応援をしていたが、我々共励係は、どうせサボッテいる奴がいるだろうと時機を見て数人で出掛けると、やはり木陰の涼しいところに屯しているのがいる。注意するとゾロゾロとプールへ向かったが、一人立つでなし坐るでなしと言ったノロノロした状態でいる下級生の所へ行った上田君はいきなりポカリと鉄拳制裁を加えたのが、いまだに鮮明に印象として残っている。正義漢と言うに相応しい彼だった。

上田信夫（出身校不明）陸軍特別甲種幹部候補生、フィリッピンにて戦死

上田（信）君のことは余り記憶が無くて申し訳ないが今回調べてみると、なんと二年・四年の二回、それも担任はモッサリ（敬ってモッサリさん）こと、数学の大井先生だった。私が休んで抜けている所をわざわざ職員室へ呼んで数学を教えて下さった。御恩は肝に銘じている積もりだが、期待に応えることの出来ない不肖の生徒だった。上田君は、穏和な性格で、柔和な面差しは、皆の心を和らげたように思えてならない。特に四年乙組は殺伐とした雰囲気のない、穏やかな空気の漂った教室がいつも広がっていて、先の見通しの立たない私の荒んだ気持ちを暴発させずに宥めて呉れたのだろう。教室は三中創立時の木造平屋建て、隣りの校舎との間はつつじなどを植えた庭になっていた。そこへ直径二米ほどの円を描いて（勿論、運動場でも）制服を着たまま相撲をやったのだった。冬ともなると天気の日には、日向ボッコに出て、教室の壁板にもたれて、ズボンのポケットに手を突っ込んで各自勝手なことを喋り、横で相撲をやって暖を取るといった調子だった。上田君は、相撲に参加することはなかった。ストーヴも一時間目の時だけ、チョロチョロと燃えていたように思う。

新宮　哲（京都府立医大）海軍予備学生、硫黄島にて機銃指揮中戦死

熱血漢だった。誰に対しても自分の思うことを言う好漢だった。話しをしていても相手が間違ったことを言えば、顔を真っ赤にして、太い黒縁の眼鏡を押し上げ押し上げ今にも相手を押し倒さんばかりに近寄って自分の説を力説するのだった。私も二回ほどやられたことがあるが、決して暴力を揮うことは無かった。先述通り、誰との話もその内容を記せないので残念だが、新宮君とは割合喋っている記憶があり、仲の良い友の一人であったと言える。不思議に思うのは、新宮君は医科の士官たるべく海軍へ入ったように思うのだが、あの近眼でどうして兵科の士官になったかと言うことだ。あの熱弁を奮って、上官を片っ端から説得して回ったように思えて仕方がない。当時、親が子供に死ねと言う者は居なかった筈で、人情として当然のことと思われる。後方勤務であるようにと祈り、そのため医学部進学者が増えたのも首肯出来ることだ。我々の同期で医科関係進学者は約二十人だったが、戦死したのは新宮君一人だった。新宮君の国を思う忠義の念の篤さには畏敬せざるを得ない。新宮君は射撃部に属し、私は大分その恩恵に浴している。

高城磐夫（出身校不明）陸軍航空兵

仇名はドーナガ（胴長）で、皆から親しげに呼ばれていた。私もその親しい輪の中にいるように思っていたが、机を並べることは一度もなくて、余り話しはしていないようだ。先生になって十年ほど終わった頃から、三中出身の後輩の同僚から「中学時代、先生は怖いでしたネ」と言われ、応援練習の時に、メガホンで頭を殴られたと言う人も出て来て弱ったことがあった。勿論、私は下級生を殴ったことは一度もなかったので、よく聞くと「ドーナガさんでしょう？」と言うので、高城君と間違えられたのだと判った。私も、胴は長く、短足だった。私の一年生の時の応援練習は共励係以外のラッパズボンを穿いた上級生なども交えて、大分厳しいものだった。地面に坐らされて応援歌を歌うのだが、上級生は長さ五十センチ位のブリキ製のメガホンを持っていて、声が小さいとポカンと一発殴るのだった。メガホンの中に亜鉛板製のものがあって、あれで殴られた者は痛かったろうと思う。メガホンを逆にして耳に当てて聞いて回ったりするので、なかなかサボることは出来なかった。怖い上級生だったが、その上級生が、「黒服は凄かったぞッ」と言うのには驚いたが、上級生も我々と同じカーキ色の制服だったのに、その前までは昔の海軍の制服と同型のチョッキ型だったのだ。

応援歌は確か六つ、又応援の型もいくつかあった。全校生がこれを歌って応援するのは府下中学陸上競技大会が植物園の陸上競技場で催される秋の時だけだった。

高城君は航空兵として戦死したらしいが、詳しく知っている同級生に会いたいものだ。

名和野潔（出身校不明）陸軍特別甲種幹部候補生　フィリッピンにて戦死

詳しく調べると、二年・四年と一緒だった人が十数人もいるのだった。皆、穏和で温厚な人達で、あの穏やかな教室の雰囲気を作り出して呉れていたのだ。このような大人しい余り話すこともない人達に支えられて、成長し、無事卒業出来たのだと随分後になって判るようになったものだ。名和野君も又その穏和な人達の仲間だった。二年の時だったか一生懸命友達を追い回し、互いにふざけ合っているのを、校舎の裏の狭い通路で見たのを覚えている。名和野君、上田信夫君、後述の松村英夫君と、生き残った山村進君の四人は、伏見の歩兵連隊の同じ中隊に入って頑張ったらしい。新兵教育後、士官たるべく豊橋の学校に全員入校し、互いに助け合って一人前になって行った由である。

四年生になると一寸落ち着きが出て、五年生からも一寸敬遠

して呉れるようになるのに、私は友達の帽子を取り上げて天高く放り投げたのはよかったのだが、風があったのかカーブを描いて体育館の上に止まってしまったことがあった。友達は怒って、先生に告げたらしく、体育教官室に呼び出されて、配属将校や体育の先生に大分油を絞られたことだった。その後、「帽子を取って来い」と言われて、恐る恐る体育館の屋根の上にあがったが、愛宕山が直ぐ近くに見え、素晴らしい景色を見ることが出来たのは望外の喜びだった。

中川大忠（海軍機関学校）　宮城航空隊整備士官として空襲時に戦死

名前に使用する漢字も流行があり、最近こそ「大」の字はよく使われているが、戦前は余り見掛けなかった。しかも、教育勅語の柱とも言うべき「忠孝」の「忠」を下に配した名前で音読し易いので、皆から「ダイチュウ」と呼ばれても気さくに応対していた中川君だった。そして、その名の通り立派に国に殉じた好漢だったと言える。必須科目として武道があり、中川君も私も柔道だった。私は小学校浪人を経て入学した上、小学校の砂場で相撲を取り、器械体操も蹴上がりが出来るので腕っ節は強く、習いたての柔道も難なくコナしていたので、クラスではどうも一目置かれていたようだった。中川君には軽い吃音が

あったが、何度もトツトツと訴えられたことがあり、「兄貴分らしくしなければならないのか」と思ったが、私はそのような性格ではなく、ただ聞いて置くだけだった。それでも心は通じ合い、中川君は弟のような気分でいるように思えてならなかった。

広島高師三年の下宿生活に入った夏の頃、「呉まで来た」と任官したての輝くばかりの少尉姿で私の前に現れたのだった。夕食後私の一人用の蚊帳の中に二人で入ってボソボソ話して寝たのが印象深い。朝早くパッと起きるや、「行くぞッ」と言って下宿の小母さんの「朝食を食べて行きんさい」と言うのも聞かず出発。呉へ早く帰る中川君を己斐駅まで見送ったことだった。

松村英夫（神宮皇學館）陸軍特別甲種幹部候補生　フィリッピンにて戦死

「マッチュン」「マッチュン」と皆から呼ばれる松村君は、やさしく穏和な性格で、「マッチュン」はそれに相応しい仇名と言うより愛称だった。三年生で一緒になったのだが、中川君も同級で二人が仲良しだったことから、私も親しくなったのだと思う。相撲は取り組むのも、相撲を観るのも好きだった。岡崎公園に巡業でやって来た大相撲を見るのに、一番太鼓の中を

入って、砂カブリ近くに坐って観戦、夕方ハネ太鼓と共に帰ったことがあった。相撲を取る方は、井尻君と一緒で、勝てる筈がないのに、むしゃぶりついて来るので、随分と転がしたものである。神宮皇學館の寮の相撲大会に出場して、とうとう優勝してしまい、これでもう一人でやって行く自信を得たと云う便りを呉れた時は、嬉しかったのを覚えている。家が北野天満宮近くだったので、放課後一緒に帰って天満宮の縁日には屋台店を共に見たりして、今出川線で帰宅したりした。

四年生終了時に、受験馴れをするため、三高を受けようといったが、松村君曰く、「受験料がモッタイナイ、どこかへ行こう」とのことなので、比叡山へ登って坂本へ下山しようと云うことになる。春休み中の三月下旬、どんよりと曇った薄ら寒い日だった。ケーブルカーを降りて歩き出すと、五・六人居た乗客はいつの間にか居らなくなってしまう。二人で喋りながら人一人通れる細い道をゆっくり登って行ったが、林の中へ入るとあちこちには雪が残っていて陰気な感じがする辺りから、松村君は黙ってしまい、とぼとぼと後から付いて来るだけになる。ふと振り返ると顔面蒼白で何か怯えたような様子だった。「元気を出そう」と、応援歌を歌ったり根本中道に到着。当時、各組の代表が百万遍から根本中堂まで走って登る競争があり、その後を全生徒が登ったものだが、その道は谷道で、よく踏み固め

られた一般道だった。しかし、私は山好きだったので、余り人の知らない尾根道を登っていたので、山の中を怖いと思ったことは無かったが、松村君はどうも怖かったらしい。しかし、その後、北山を二人で何度も登ることになる。松村君は母親一人子一人の母子家庭だった。

水島宗良（神戸高等商船）海軍予備学生　沖縄特攻、大和艦上にて戦死

小柄ながら背筋がピンと伸びていて、いかにも敏捷そうな体つきだった。三年生で一緒になり、簡単なことを割合話したように思うのだが、明快に答えてそれ以上は話さない寡黙な人だった。三年丁組の諸君と机を並べたのは九月の終わり頃迄で、私の希望進路を変更せざるを得なかった時で、又、そのお蔭で今迄生きることが出来たとも考えられるので、私事ながらお許し願いたい。この夏休みに、護国神社の道造りに勤労奉仕として参加、モッコの土運びに汗水を流したことだ。盲腸炎（現在の虫垂炎）の手術を夏休み中にする予定だったが、余りにも元気だったので、そのまま二学期に入った途端、虫垂炎で臥床、当時は重病の中に入り、絶対安静の流動食生活になり、掛かり付けの博士の先生から、全快してからでないと手術出来ないと言われ、そのまま臥床していて起きあがろうとすると、又、虫

垂炎が起こり、その後二回同じ様なことが起こって、手術をしたのは、十二月末で、病院で正月を迎えたような次第。三ヶ月も殆ど流動食生活で、体は痩せ細り、歩くことから始めねばならないので、而も肝心の勉強は抜けてしまっているので、落第を覚悟して、体力の恢復に専心したのだった。ところが、一学期に出征された楠先生の後を引き継がれた池田先生がHのバッジをつけるようになっていた私の為に、どのような熱弁を職員会議で奮って下さったのか、半分以上休学の落第当然の私を進級させて下さったのだった。先生の大恩が判るようになったのは、軍隊から帰ってからの戦後のことだった。当時の私は、エンジニアになる積もりでいたが、理数系が全然理解出来なくなり、文化系に方向転換したものの、又々第一志望校は駄目、第二志望校の広島高師へ泣く泣く都落ちをしたのだった。文化系だったのに、師範系の学校へ入った為、徴兵延期の特典を受け、多分に生き長らえる方向へと運命は向いたと言えよう。しかし、海軍野郎の私は海軍を選びましたが、敗戦で助かったような次第です。

最近、映画〝男たちの大和〟を観ましたが、あの戦闘場面では、水島君の持ち場はどこだったのだろうとばかり思い、機銃分隊の激闘の上に水島君を重ねて見ていました。

若林謙太郎（出身校不明）陸軍

黒縁の眼鏡を掛けたやや浅黒い顔の真面目な人だった。四年生の時に一度同級になっているのだが、若林君には誠に申し訳ないのだが、殆ど記憶らしいものが無く、何も書くべきものがありません。悪しからず、お許し願います。

宇田敏夫（出身校不明）

戦後間もない頃、「宇田君は海軍で戦死したらしい」と言う風評を聞いただけで、その後も、そうした噂さえも聞くことはなかった。一年生の同級生だが、クラスで一番背が高く、ポケットに手を突っ込んで、背を丸めて歩いていたように思う。姉妹があって、婦人雑誌の女性の写真を無雑作に破ったのを持ってきて「これ妹や」と言ってニタリと笑ったりする悪戯心のある人だった。

近くにタクシー会社があり、運転手に可愛がられて、夜中に出歩く人が少なくなると乗せて貰って、時には無免許運転をさせて貰い、運転できるようになっていたらしい。当時は外車がタクシーに使用されていたのか、シボレー・フォード・ダッジ・プリムス・クライスラーなど車の話をよく聞かされたものだ。